

社会科学の基礎概念としての帰属概念の系譜学

———社会心理学者フリッツ・ハイダーのオーストリア時代の知覚研究を手がかりに———

神戸大学大学院 梅村麦生

要旨

本報告は、とりわけニクラス・ルーマンらを介して、現代社会学のコミュニケーション・メディア論やリスク社会論に影響を与えている、社会心理学における帰属理論の定礎者であるフリッツ・ハイダーが、法学や経済学といった近代の社会科学の基礎概念の一つである「帰属」(Zurechnung, attribution)という考え方を、いかにして知覚研究の領域に導入し、そして対人関係の心理学へと発展させていったのかを検討し、20世紀前半以来の社会科学における帰属概念の系譜の一端を明らかにすることを目的とする。

帰属概念は、社会心理学の中ではハイダーの研究が劃期をなしたものとして知られているが、他の社会科学の諸分野を見ると、必ずしも新しいものではない。法学や経済学では、ハイダー以前から(主にドイツ語圏で)方法論上で活用されており、基礎概念の一つであったとも言える。さらに例えばマックス・ヴェーバーも、法学の帰属概念を自身の社会科学方法論に導入しているが、ルーマンら現代の社会学者はそうした自分野の古典的な帰属概念ではなく、あえて隣接分野のハイダーから帰属概念を導入している(例、Luhmann 1997)。ここには、どのような違いが見られるのか。つまり、旧来の社会科学の帰属概念と、ハイダーが知覚の心理学、さらに対人関係の心理学に応用した帰属概念は、どのような関係にあり、またどのような違いが見られるのか。以上の検討のために、特にフリッツ・ハイダーの研究活動の初期にあたるオーストリア時代の研究、主に未公開の博士学位論文(Heider 1920)を取り上げ、その中でどのように「帰属」という考え方が導入され論じられているのかということ、およびその知的背景とその後の展開を研究する。

ハイダーは、後に有名になった初期の研究「物とメディア」(Heider 1926)の中で、知覚における帰属過程の研究に従事しており、そして本報告で見ていく通り、その構想は博士学位論文「感覚質の主観性」(Heider 1920)の検討を発展させたものであることがわかる。さらにその構想は、「知覚システムの能作」(Heider 1930)に受け継がれ、他方でハイダーのアメリカ移住後、特に「社会的知覚と現象的因果性」(Heider 1944)という論文以降で対人知覚の領域に応用されている。また博士学位論文の主題設定に立ち返ると、その構想はハイダーの指導教授でグラーツ大学の心理学研究室の設立者であるアレクシウス・マイノクの対象理論(Meinong 1906)の影響を大きく受けている。マイノクが思考の対象について論じていたことを、ハイダーは知覚の現象に即して読み替え、さらにそれを対人知覚へと発展させていったということが考えられる。

文献

Heider, Fritz, 1920, *Zur Subjektivität der Sinnqualitäten*, Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde, Graz Universität. [Unpublished]

Heider, Fritz, 1926, Ding und Medium, in: *Symposion*, 1(2), 109-157.

Heider, Fritz, 1930, Die Leistung des Wahrnehmungssystems, in: *Zeitschrift für Psychologie*, 114: 371-394.

Fritz Heider, 1944, Social Perception and Phenomenal Causality, in: *Psychological Review*, 51: 358-374.

Luhmann, Niklas, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, 1-2, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2009, 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会学』1-2, 法政大学出版局。)

Meinong, Alexius, 1906, *Über die Erfahrungsgrundlagen unseres Wissens*, Springer.